

## ラーダーの信愛

文字通りの知識は、信愛をさずけることはできません。信愛はどんなグル（導師）からも手に入れることはできません。信愛を与えることのできる友人もいません。信愛は、その人自身のハートの中から生じるべきものです。それはハートに詰め込むことはできないのです。ゴーपी〔牧女〕たちの信愛は、純粋で無私でした。それは着実で、揺るぎないものでした。中でもラーダーは傑出していました。ラーダーはクリシュナと一つであると感じており、完全にクリシュナと一体化していました。ラーダーには世俗の願望はなく、ただクリシュナに対する渇き、神を求める切望だけしかなかったのです。

ある日、クリシュナはルクミニ妃と一緒に馬車に乗って、近隣の村へ出かけました。その村の住民たちが皆集まってきて、騒々しく熱狂的にクリシュナ夫妻を大歓迎しました。ルクミニは、クリシュナが自分のそばにいた一人の女性に釘づけになっているのに気づきました。その女性もクリシュナを見つめて

ていました。クリシュナはゆっくりと、穏やかに言いました。

「ルクミニー！ そなたはラーダーを知っているかね？ 彼女は私の熱烈な帰依者なのだよ」

これを聞くと、ルクミニは馬車から降りてラーダーのそばへ駆け寄り、儀礼的な挨拶を交わした後、しばらく自分と一緒に過ごしてほしいとラーダーに頼み、ドワーラカーの王宮に彼女を招待しました。

翌日、ラーダーは招きに応じてドワーラカーを訪れました。ルクミニは正面玄関でラーダーを出迎え、宮殿の中に案内しました。ラーダーはクリシュナの話をし、クリシュナの栄光を歌いながら、ルクミニと共にしばし宮殿で過ごしました。二人は、クリシュナ神との体験の喜びを分かち合い始めました。ルクミニ

は、ラーダーに熱いミルクを出しました。そうすれば、ラーダーがゆっくり



ミルクをすする間、もうしばらく一緒にいてクリシュナの話ができるからです。ところが、ラーダーはあっという間に熱いミルクを飲み干してしまいました。とはいえ、二人の会話はしばらく続き、それからラーダーは宮殿を出て、自分の村へ帰って行きました。

その夜の事です。クリシュナはとても疲れて帰宅しました。クリシュナはルクミニーに言いました。

「ルクミニー、見てごらん！ 私はすっかり疲れてへトへトだ。私は足に煮えたぎるような熱い刺激を受けたのだ。あれは本当に耐え難い熱さだった」

ルクミニーは、クリシュナの足に水膨れができているのに気づき、一体なぜ、どうして、そんなことが起こったのか、不思議に思いました。するとクリシュナは言いました。

「ルクミニー！ そなたは今日の午後、招きに応じて訪ねてきたラーダーに、熱いミルクを出しただろう？ ラーダーはあのミルクを一息に飲み干したのだ。私の足はラーダーのハートの中にある。だから、あの熱いミルクは私の足の上にこぼれ落ちた。今、そなたが見た水膨れは、あの煮えたぎる熱い刺激を受けた時にできたものなのだ」これが、ラーダーの信愛の深さでした！

ある日、一人の牧女が幾つか穴のあいた壺をラーダーに手渡して、ヤムナー川から水を汲んでくるように言いました。ラーダーの信愛を試すためでした。ラーダーはそれらの穴には気がつきませんでした。ラーダーは壺を川に浸しながら、絶えずクリシュナの聖なる御名を唱えていました。彼女がクリシュナの尊い御名を口にする度に、穴は次々と塞がっていきました。その壺は少しも水漏れすることなく、ラーダーは水がいっぱい入った壺を家に持ち帰ることができたのです。それが、ラーダーの信愛の深さでした！

ラーダー (RADHA) という名前の中で、「R」は「ラーダー」を表し、「A」は「アダーラ」、つまり基盤を、「D」は「ダーラ」、途切れない流れを、次の「A」は「アーラーダナ」、すなわち礼拝を表しています。ラーダーの信愛は、油のような途切れない流れ、ダーラのごとく不動のものだったのです。ラーダーはクリシュナの御名を繰り返し唱えていたため、クリシュナもまた繰り返しラーダーのことを思っていました。これが、帰依者とそのデーヴァ（個人的な神）との間にある絆であり、親密さなのです。